

阿仁比立内地区（松橋時幸さんの記憶）

松橋家では時幸（昭和9年4月4日生）・ユリ子夫妻で14代目であるが、生年月日の判明した先祖は10代目佐太郎（文化10年1月1日生）・ソノ夫妻、11代目文蔵（天保14年10月12日生）・キク夫妻、12代目覚蔵（明治21年4月13日生）・スミ夫妻、13代目茂治（明治44年9月1日生）・キンコ夫妻である。

昭和9年生まれの時幸さんの記憶では、高校生になった頃はすでにマタギに関する昔の用具や装束は使われなくなりつつあったとの事であるから、松橋家で昔の道具や用具を実際に使用したのは父の茂治さんの代までであった。茂治さんの時代も現代風に変化しつつあったようだ。そんな状況の中で高校生の時幸さんは、昔のものを使っている先輩達がまだ結構おられた事が幸いして、その方達の仕草を見て使い方を覚える事ができた。またそうした先輩達からいろいろな話を聞かせて頂く機会も多く、昔の事に詳しくなると言っておられた。

1 生活の背景

かの（焼き畑）

基本的にはどこの家でも農業が基盤で稲作をしていた。昭和33年頃までは「かの（焼き畑）」を作って食糧の増産をした。営林署の山の木が生長して良い木になると伐採したが、その折切り落とされたスギの枝が沢山であるためそれを焼いて畑にした。それを「かの（焼き畑）」と言う。ソバを最初に作った。次の年の春、前年に火をつけた時の残骸（ほど）を一箇所に集めて火を焚いて灰にし、そこにダイコンを蒔いた。「かの（焼き畑）」でとれたダイコンはとても甘く砂糖のようだった。次はダイズ、アワ、キミと蒔いた。ヒエは「かの（焼き畑）」では作らず、田圃の水口（山からしみ出した冷たい水）の所にちょこっと作る程度だった。昔の人達はどんな山奥にも入って行って開墾しており、そういう所には立派なスギが植林されている。偉いもんだと思ったそうだ。

博労宿から旅館へ

かつて比立内から仙北方面へ行くためには、大覚野峠を越えて先ず仙北の松葉まで歩いて行くという行程であった様だ。大覚野峠には「やすべ茶屋」があり、そこで一息つく事ができた。その峠には仙北方面から来た人々と阿仁方面から来た人々が互いに運んできた物資を交換する場所があり、米と野菜や毛皮などが交換された。炭や衣服その他の売買も行われたようである。そうした背景の中で、峠越えのためにはウマを「肥やさない（力をつけないと）」歩けないため「博労宿」が必要だった。現在松橋家は旅館を営んでおられるが、その前身は「博労宿」だったそうだ。「博労」というのはウマの病をなおしたり売買したり周旋したりする人達の事で、松橋家はそういう人達が出入りする宿であった。「博労宿」の時代に2回くらい火災があったそうだ。「博労」が自分のウマに餌をやるために、梁の上に保管してある「まぐさ」を取りに行った時、うっかり「提灯」を忘れてきたために火事になってしまったという話が伝わっている。

松橋家でいつ頃から「博労宿」をしていたかは分からないそうだが、「博労宿」の場合は宿賃その他に曖昧な所があったため、12代目の覚蔵（明治21年4月13日生）・スミ夫妻の時代に「^{はたごや}旅籠屋」としての正式な許可をもらい旅館になった。

山師と流送と「またぎ（狩猟）」

昔は道もトラックもないため伐採した木や木炭や米を沢や川を使って流送したものである。

江戸時代に遡るが、松橋さんの先祖は山師をしており秋田の佐竹藩の命を受けて仕事をしていた。山師というのは木を伐りだして搬出する人の事である。佐竹藩から見当をつけた領地内の木を伐るように命令が出ると、それらの木を伐りだして比立内川（阿仁川の支流）を流送した。昔は「安の滝」の上からも木を伐って運ぶことがあり、何度も何度も堤（流送するための貯水池）を作りかえて木を流送したと聞いている。また阿仁合には佐竹藩の阿仁鉦山があり、最高の時は3千人くらいの抗夫が働いていた。

そのため抗木や炭や食糧が大量に必要とされる社会背景があり、松橋家は「夏分(夏の仕事)」としては阿仁合まで抗木を流送したり、木炭を調達して舟で流送した。米も三千人の抗夫を賄えるほどの土地が阿仁になかったため、仙北大曲方面の米を購入した。その米は大覚野峠を越えて搬入された。大覚野峠の中間まで仙北の人達が運び、そこから阿仁の人が比立内まで運んできて、松橋家の米の倉庫に入れた。そこからは舟で阿仁合まで流送した。そうした仕事もしていたため松橋家は1年中忙しかった。そこには若い働き手も沢山いたので彼らの休養が必要になり、冬は主にウサギ狩りをさせたり、クマ狩りやヤマドリ撃ちをさせたりしたそうである。松橋家は頭領であり、そうして得た獲物にもお金を払って引き取る事をしていた。そのような経緯が「またぎ(狩猟)」をする始まりだったようだとの事である。その頭領が「しかり」と呼ばれる人で松橋家は代々「しかり」の家であった。

家で使う薪の事

薪は国有林から払い下げられたので、使用する薪は山で伐って沢や川を使って流送した。それを用水路へ導いて「木揚げ場」で引き上げて乾かし、次に農作業が終わった時点でその薪を[そり]で運び「木小屋」へ納めた。ここで薪として使用できるようにする。「木小屋」から家の「にわ」へ薪を運ぶのは子供の役目であった。「木小屋」は風通しがよく木が乾きやすい構造である。「薪は半仕事だ」という言い方があったが、1年の半分が薪作りに費やされるという意味で、祖母のスミ(根子出身)さんはその通り1年の半分以上を薪作りに費やしていたものである。それほど薪作りは冬を越すために大事な仕事であった。

生活用具の製作

祖母のスミさんはホオ材で作った[機(はたし)]で織物をしていた。家には[麻機]と[木綿機]の両方があった。二階に[機(はたし)]が置いてあったが、そこは暖かくて明るい場所であった。時幸さんが小学校2、3年生の頃まで機織りをしていた。季節は11月下旬頃だったように記憶している。衣類は女の人達を作るが、時幸さんが使った[はらかけ]は破れにくいように厚い生地を選んだため、家で使う針が通らず、鷹巣の仕立屋に頼んで[ミシン]で作ってもらった。その[はらかけ]には星形のミシン縫いの刺繍が施されていた。県外の展示に貸し出したがそのまま戻ってきていない。星形の刺繍はちょっとやさそとで破れないよう丈夫にするために刺したものだそうだ。マタギ資料館に同じような[はらかけ]があったため、もしやと思い時幸さんに着けて頂いたが、小さくて寸法が合わず刺繍の形も違うものであった。

[毛たび][手つきゃあす][着皮]の素材として、アオシシ(カモシカ)の毛皮は優れていたが、捕れなくなってからはイヌの皮で代用する人もいた。[毛たび]を主に履いたのは祖父の覚蔵さんの時代まで。父親の茂治さんも時幸さんも何回か履く機会はあった。マタギでも[毛たび]を持っていない人は藁製の[つまご]を履いていた。[毛たび]はとても履き心地の良いものだが、5、6年履き続けると底が切れて孔があいてしまうので、いつも[毛たび]があるとは限らなかった。「しかり」の家では祖父の代までは「またぎ」の時は[毛たび]を履いたが、それ以外の仕事の時は藁製の[つまご]を履いた。父の茂治さんや時幸さんの時代にはゴムの[長靴]が主流になっていた。[つまご]は冬の履きものだが、夏でも川などヘビがいる所では履く事があった。1箇月に5足位履きつづいた。[わらじ]は「またぎ(狩猟)」の時の履き物ではないが必需品である。1年間に、大人1人で50足も使用した。「あくど(踵)」の部分が一番壊れやすい。[すべ]という履き物は子供や女性が近所に行く時に履いた。[あぐとすべ]というものがあり、これは男性も履いた。[ごんべ]という履き物は藁材で編み上げた[くつ]の様なものを言う。藁製の[手つきゃあす]は濡れると凍るので、「またぎ(狩猟)」では使用せずに、畑仕事の時に使用した。藁製品は管理が大変である。夜になると濡れたものは凍るので壊れやすくなる。そこで凍らないように[火棚]の上にあげて乾かした。

「ゆるぎ(炉)」の脇に薪を保管してある場所があった。その傍に[きばたくり]という細工物をする木の台が置いてあり、[鍬の柄]などをそこで削って作った。[スキー]も削ったことがある。「ゆるぎ」

では1m弱の長さの木を燃やしていたが、[きばたくり]では薪を割らない。藁製品に使う藁材は「にわ(作業場)」に置いてある[藁打ち石]の上で、湿り気を与えずに乾いたままの藁束に[藁打ちきね(槌)]で叩いた。何回か束をほどいては細かく砕けた藁を取り除き、またまるって叩いた。そうして繊維を軟らかくした藁材で「ゆるぎ(炉)」の脇で藁製品を作った。

[背負い縄]はマダ製であり時幸さんも作った。縄を作る時に特別な道具は使用せずに手で撚り合わせた。最初2本撚りにしてからもう1本を絡げて3本撚りにしていく。縄の場合は直径4cm程度のマダの木から皮を剥いで使用した。[けら(蓑)]を作る時には太い木の皮を使用する。[けら]は普通の農作業や山仕事の時に着るが、猟の時には着ない。時幸さんは岩に生えている細い草(名前不詳)で作ったものを[簀]と言い、[けら]はマダ(マダ)の皮で作ったものを言うのではないかとっておられた。細い草がない場合は藁でも作る事があったそうだ。

時幸さんと鍛冶屋さん

[ふくろながさ]と言う狩猟用具があるが、これは昭和50年代の後半に時幸さんの発案で荒瀬地区の西根鍛冶屋に作ってもらったものだそうだ。これは「ふくろ」の部分の柄にして木を伐ったりクマをさばいたりする事のできる[ながさ]として使う事ができる。一方で「ふくろ」の部分に現地調達した長い木を削って作った柄を差し込んで[たて]としても使う事ができる。[ながさ]と[たて]の両方を持って歩くのは邪魔になるという考えから、[ふくろながさ型のたて]が生まれた。マダギの七つ道具と言われるものを工夫して、携帯する道具を減らし、一層身軽に動けるようにした訳である。時幸さんは子供の頃から傍にあった松橋鍛冶屋さんによく出入りしていたそうだ。11月頃になると寒くなってくるが、鍛冶屋さんは年中火を使っているため暖かく、時幸さんにとってはかっこうの遊び場になっていた。夏冬鍛冶屋さんに行っていたそうだが、夏は[カジカやす][マスやす][じゃっこやす]などを作ってもらい、冬は[ながさ]を作ってもらったりしていた。鍛冶屋さんはまさに道具が変幻自在に作られていく現場である。道具をあれこれ工夫して製作するという事が当たり前だった子供の頃の環境は、クマを突く事も木を伐る事もできる、万能の[ふくろながさ]のアイデアを、当然の事のように生み出したのである。

市の事

様々な日常の生活用具や道具は市が立つ日に入手したが、市が開かれる前は「商人^{あきんど}」さんが[馬そり]に様々な道具を付けて売りにきていた。時幸さんの記憶では、昭和34、5年頃に茂治さんが松橋家の土地を貸す形で市が開かれるようになった。現在は別の場所に移ったが継続して開催されている。市日は普通の月の場合は5日、15日、25日の3回開かれたが、例えば次の月が正月というように特別な場合は、「詰め市」といって4回開催され、その分次の月は1回休むというきまりになっていた。市には野ウサギや魚、[毛皮][毛たび][手きゃあす][ながさ][やす][鉦][とび][鎌]など、「またぎ(狩猟)」の道具あるいは農具、漁具、山仕事用の道具など様々なものが並んでおり、一般の人が買っていた。金物類は鍛冶屋さんが作ったものである。鍋釜の類は出ていなかった。イタヤ製の[箕]は市では扱っていない。[箕]はイタヤカエデの若木とサクラ樺を使うため、材料を調達できる季節が限られている事もあって、殆どの場合注文製作だった。松橋旅館に[箕]を10枚くらいも担いできて売り歩く人が宿泊する事もあった。時幸さんによれば比立内のマダギの生活を支えたのは野ウサギだったそうだ。正月の頃には猟で得た獲物も特別多くなっており、正月前に開かれる市には、野ウサギが沢山吊り下げられていたものである。これら売って得たお金は正月仕度に当てられた。

毛皮の売買

「またぎ(狩猟)」で得た獲物の毛皮は、ほとんどの場合、売りに行くのではなく商売をやっている人が買いに来た。この辺では阿仁合の高田商店が前もって買いに来る日を連絡してくるので、皮を干して貯めておいた。1年に2回くらい買い付けに来た。現金取引である。テンの毛皮にはシシテン、クロテンという言い方があり、毛皮の裏の色で付けられた名前である。これらは安い。表の毛の色で付けられ

た名前でネジロテン、ネアカテン、キイテンなどと呼ばれる毛皮があるが、これらは高く売れるテンである。ネジロテンが一番高かった。かつてはテンが1匹2万円くらいになった事もある。子供達は[竹筒]や[がばさみ]で捕ったイタチを売ったが、一番高い時で1匹1200円くらいになった。そうして得たお金で子供達は自分たちが履く[長靴]や身の回りの品を買っていたようだ。昭和20年頃の話である。テンとかムササビ(バンドリ)の皮はロシアの方に防寒用として売られた様だ。木に登ってムササビやモモンガを捕った。この地域ではモモンガをハクチョネズミという。ムササビは軍隊の防寒具として高く売れた。アオシシ(カモシカ)は昭和9年に天然記念物となり規制された。

薬の事

比立内地区では製薬を仕事にするという事はあまり盛んではなかったらしい。しかし捕った獲物は一般的に自家用として昔は毛皮や肉ばかりなく、クマでは胆、舌、骨、掌、血、脂身、子宮、雄クマの性器など、他にはサルの子など薬として活用されていたようだとの事である。クマの頭骨や脛の骨などは糠を燃やす時に入れて黒焼きにして砕いた。また血は「ふえたり(クマの血を乾燥させたもの)」を砕いた。また「さんこ(産子)」と言って生まれて間もないサルの子やクマの子を乾かして、薬研で磨り潰して薬にしていた様だ。マムシも干して磨り潰して薬にした。これは家畜にも飲ませたそう。産後の女性は貧血気味になるので、「ふえたり」を飲ませ増血剤にしていたとも聞いている。「配置売薬」とは置き薬の事で、富山の薬売りは有名である。そうした行商の人が薬にしない前のものを買いきた際、松橋旅館に泊まった。市日の時に合わせて泊まっていた。そうした機会に薬の作り方を教えてもらう事があったそうである。今の人「ふえたり」などは作れないし効力も分からない。しかしクマの胆は今でも薬屋が買いに来る。クマの胆を挟んで乾かす板があり、マタギは以前からそれを使用していたのだが、20年位前に他県の人が特許をとってしまった。クマの胆は丸いと量りにくいので平にする必要がある。クマの胆は乾いて萎んできたものを手揉みして平たくする。乾かして3、4日以降は1日に2、3回手揉みをし、仕上がるのに10日間位かかった。

2 またぎ(狩猟)

身支度

時幸さんの祖父や父の頃の身支度は、先ず[もっこふんどし]を着けてから素肌の上に[肌着(麻布の1枚もの)]を着け、[はかま]を穿き[かっぱう]を着て[はらかけ]を着けた。[はらかけ]には大小様々なポケットがあり、[銃]に関する小物類が使い勝手よく仕分けして納められていた。手の甲に[てうえ]を着け、脛には[はばき]を巻く。[こはばき]を「あくど(踵)」から足首にかけて巻き、[毛たび]や[つまご]を履く。防寒用の[頭巾]を頭から耳にかけて覆って顎の下で結ぶ。その上に[あまぶた]を被る。[着皮]は毛が外側になるように着ける。[はらかけ]の上に[弾帯]を着け、着皮の上から弁当や刃物を納めた[くらげ]や[狩猟用のリュック]を背負う。そして[村田銃]や[元折れ銃]をかつぐ。[かんじき]は履くか背中に背負う。[手つきゃあす]を腰に付けるか手にはめてから[たて]と[またぎべら]を持つと身支度が完了する。

時幸さんの時代にはメリヤスのシャツなどを着た。あまり厚いものを着ると汗が流れて良くない。秋の頃クマを追って山を越える時など、暑いと先に進めなくなる。クマの行く先が分かっているので、待ち伏せのため先回りをしなければいけないが、汗を流すと体力を消耗してクマの後になり、猟に支障が起きる。汗をかくと次は体が冷えて寒くなり風邪を引く。「またぎ(狩猟)」とはそれだけ過酷な運動量を伴う営みのため、薄着を心掛ける事は、狩をスムーズに行くと同時に、体を守るためにも重要な事であった。

「もの」は命の綱

時幸さんが20歳になるかならない頃に「雪庇(せっぴ)」の裂け目に落ち込んでしまった経験がある。その時は4m位落ちたが、いい具合に隙間があったので裂け目の中で[ながさ]を抜き、刃の先で雪に

穴を掘って階段を作り、1時間くらいかけて裂け目から脱出したそうだ。2月から3月にかけて「雪庇(せっぴ)」ができやすくなる。「だし」とも言い、風下の斜面に尾根からせりだした雪ができる。通常だとそれがまくれて亀裂が生じるが、4、5日も吹雪くとその亀裂の上に雪が降り積もって亀裂が見えなくなってしまう。そのような所は一見すると邪魔なものがないと歩きやすく見えるが、とても危険な場所、うっかり歩くと雪崩が起きて巻き込まれたりする。時幸さんは雪の上に見えている小さな木を目安にして歩いた。歩くには邪魔になるような木だが、それを一歩踏み越えると「だし」の部分に入ってしまう危険である。そこで尾根の部分では木の枝が見えている所を探してそれを伝って歩いたそうである。木がある所であれば仮に滑落した場合でも木の枝を階段状に辿って出てくる事ができるからである。「わば」と言うのは新雪の「表層雪崩」のことであるが、その「わば」に巻き込まれた折、[またぎべら]や[さって]をざっくり差してそれに掴まって助かった先輩達がいた。そういう時に[またぎべら]や[さって]に覆い被さるように体重を掛けると、その重みで転げ落ちてしまうので、[またぎべら]には本当に掴まる程度が良いと言うことである。また雪崩に巻き込まれた時は、うずくまってばかりいないで、とにかく泳ぐように手足を動かすと「わば」の上に上がってこられるという事である。ちなみに「なで」とは前走雪崩のことである。

[またぎべら]は「またぎ(狩猟)」の時の7つ道具のひとつである。山の斜面を歩く時、山側に杖のように突いて歩いたり、傾斜地を登る時に胸まである雪を漕ぐようによけて歩いたり、雪洞を掘ったり、ウサギが逃げ込んだ穴を掘ったりする時などに使用した。また銃座にもした。アオシシ(カモシカ)などを捕まえた時などは獲物の急所を叩いて殺すのにも使ったようだ。例えば、鉄砲で動物を撃った場合でも、急所をはずすと動物が歩きまわって人間の方が危なくなる事がある。そういう場合は一撃する必要がある。比立内回りではイタヤ材で作った[こながえ]を持ち歩く事が多かった。ナラ材で作ると重いが壊れにくいので、獲物を叩き殺す際には威力を発揮した。イタヤ材の場合は軽くて携帯にはいいが、雪の下に横たわっている木に気が付かずに強くひっぱたいてしまったり(だいごし)すると、柄が折れる事もある。ありとあらゆる事を想定しながら「もの」を使っていかないとえらい目に遭ってしまう。「春またぎ(狩猟)」の時、[またぎべら]を股に挟んで柄の部分で両手で持ち、体を浮かせるようにする。[またぎべら]で時にブレーキをかけながら、急な斜面を下りる事がある。その時[長靴]は[かんじき]を付けているので[スキー]のような役割をになって雪に乗って滑る事ができるのである。そうした使い方をしていると[またぎべら]が反ってくる事がある。[さって]は[またぎべら]よりも新しく改良したものである。カヤぶき屋根の雪下ろしにも使用したが、雪洞作りをする時などは[またぎべら]の半分の時間で掘る事ができ使い勝手が良い。山で[またぎべら]が折れてしまった場合は代用品を作った。例えばその辺にホオの木が生えていれば、枝の部分を[ながさ]で削って切り取り、[鍬の台]に似た形に成形した。子供の頃には[さって]も[ながえ]も両方あったと記憶している。

火熾し

雪洞作りをするのは非常時である。普通は小屋掛けして常時3名くらいが泊まれる場所があり、泊まる必要がある場合は小屋を目指した。しかし急に吹雪きになったり、雪が沢山降って疲れて歩けなくなったような時は、雪洞を掘って休息したり野宿したりした。昔は山小屋に泊まった時など[マッチ]がない時代は[火打ち石]と[火打ちがね]を使って火を熾した。火種になるものを入れる[ほこじ]という容器が付帯しており、「フジ炭」や「キリ炭」のように柔らかい木を炭にしたものを磨り潰して粉にし、それに入れておいた。火種に[火打ち石]と[火打ちがね]をこすって火花を落として火をつける。しかしその段階では炎は上がっていないので、イタヤの木やヤマウルシの木のように乾燥しやすい木を[鉈]で削り、「鉋くず」のようにしたものに火を移す。「がんび(シラカバの木の皮)」があれば一番燃やすのに良い。雨が降った時に火つきがいいのは乾燥したタケであり着火剤になる。[火縄銃]の時代は皮細工製の「ほこじ」があった。またその時代の火薬入れの事を[どくすりっぽ]という。

[ながさ]で橋を架ける

長くて重い身の[ながさ]は、川岸の立ち木を伐って橋を架けたりする時にも活躍する。木を伐り倒す際はせっかく伐った木が流されてしまわないように、伐り倒し方に工夫をする。橋を架けたい方向、つまり木を倒したい側の根元に[ながさ]を振り下ろして削り、反対側は削らずに元の木に付いた状態にしておく。ある程度削ると反対側が元の木に付いたまま倒れるので、うっかり伐った木を川に流してしまうということがない。クマを解体する時にも[ながさ]を使うが、[まきり]という刃物の方がきれいに切ることができる。クマの口を解体したり、クマの手足の指の関節を外す時に使用する。[はらかけ]のポケットの真ん中に保管して持ち歩く人もいるが、普通は[狩猟用リュック]に入れて持ち歩く。刃を研ぐのは自宅で行うが、山小屋に小さいものを持って行って備え付けておくこともある。

クマとの接近戦

クマと接近戦になった場合は、クマが立ち上がって腹を見せる状態になるのでそこを[たて]で突く。また子育てしているクマの穴の傍をマタギが知らずに通ったような場合、マタギの存在に気づいたクマがうなり声を出すことがある。マタギの側はその声で穴の中にクマがいることが分かり、クマとの闘いが始まる。マタギがクマの穴をのぞき込む際は必ず[たて]の穂先を目の高さに構える。そうしてクマが出てくるのを待つ。穴からクマが出て来た場合、そのような構えをしているマタギの方は[たて]を突き出したまま反射的に顔をぐっと後ろに引く。クマの方はマタギが構えている[たて]に突き刺さる事になるが、クマというのは目の前にあるものをクマ自身が持って引き込む習性があり、突き刺さった[たて]の場合も、同様に自分で持って引き込んでしまう。そのためより深く[たて]がクマに突き刺さる結果となる。

比立内ではクマ狩りには殆どイヌを使わなかった。山にはそれぞれの地域にマタギの権利があり、越えてはならない境界がある。しかしイヌにはその境界が分からず、クマをどこまでも追いかけてしまうので他地域に迷惑をかける事になると共に、折角エネルギーを使って追っている貴重な獲物を、手の届かない他地域に追い込んでしまう結果にもなるからであった。

アオシシ(カモシカ)の猟

アオシシ(カモシカ)を捕ってもいい時代は銃でも撃つが、アオシシ(カモシカ)は「追い込み」をして捕ったそう。追い込まれると川に入る習性があり、寒中川に入ると、長い毛についた滴が凍って団子ようになり、よけいに歩けなくなるそう。するとまた川に入るため弱ってくる。そこで最後は4尺2寸の分厚い[おおながえ]で、角が生えている後ろ側の急所をばんばんと3回ほど叩いて捕ったそう。イヌを使うとイヌが噛まれるし、角で殺されることもあったという。角が一番怖い。固く丸めた雪玉をアオシシ(カモシカ)めがけて投げた人がいたが、その折、アオシシ(カモシカ)は角を器用に使ってその雪玉を割った。角は本当に注意しなければ人間だって殺される事もある。そこで疲れ果てた所を見計らって捕ったそう。

アオシシ(カモシカ)の毛皮

[毛たび][手っきゃあす][着皮]の素材としてアオシシ(カモシカ)の毛皮は優れているので、昔はその毛皮を活用した。1頭のアオシシ(カモシカ)から素材を調達する際の部位は、根子地区の場合と相違する。比立内の場合「二足裁ち」と言い、4本の脚と顔から[毛たび]一足と[手っきゃあす]一対を作る。[毛たび]はひずめのある甲の部分を利用する。[手っきゃあす]は頬の部分と脛の毛皮を利用して接ぎ合わせて作ったそう。

ウサギの[わらだ]猟

ウサギは夜行性で朝4時頃に眠る。その前に「えんばね」という天敵を惑わすためのカモフラージュの足跡を3箇所くらい作る。それから日中眠るための巣穴を作る習性がある。「えんばね」の3箇所の距離は10~20m離れている。それ以上離れている場合もある。天敵のタカやテンに襲われる事があるので、ウサギは逃げる場所を確保するため穴を掘る習性がある。主に上から襲う猛禽類のタカのような羽音がし

た場合は掘った穴に隠れる。そうしたウサギの習性が分かっているので、マタギはウサギがカモフラージュのためにつけた「えんばね」を目印に、ウサギの眠っている穴を見つける。一番捕りやすいのはそうした穴で眠っている時である。外に出ているウサギを見つけた場合は、20～30m離れた所からその付近に「わらだ」を2回くらい投げる。投げられた「わらだ」はタカの羽音に似た音を出すので、ウサギがタカと間違えて、後ろ足で雪を蹴るようにして巣穴に入り込む。それを見定めてからマタギが走って行って、そこから出られないように穴を雪で閉じ、穴の辺りを「かんじき」でびっしり踏み固める。その際「あぶつら」に触らないように注意しなければならない。「あぶつら」というのは雪の中に隠れた柴の事である。ウサギは雪しかない場所に穴を掘ることもあれば、雪の重みで柴が撓った状態の上に、更に雪が降り積もったような場所に穴を掘る事もある。「あぶつら」というのはその柴がアーチ状になった部分で、アーチ状になっている柴の下は雪が軟らかくてウサギにとっては穴が掘りやすい。しかしその「あぶつら」に気づかずにマタギが踏み固めたりすると、「あぶつら」を叩く事になり、その音がウサギにマタギの存在を知らせる事になる。するとウサギは素早く巣穴から逃げてしまう。クロモジの木は撓る木なので「あぶつら」になりやすい。首尾良く穴を踏み固める事ができたら、脇の方から「さって」や「こながえ」でウサギを掘り出す。脚を捕まえて引っ張り出したら、耳をもってぶら下げて、頭の付け根に手で一撃を加えて捕る。ウサギの巣穴は毎日違う。寒に入って「かんだち」の頃になると、ウサギは繁殖期のため山の上に沢山集まる。この時期はウサギを捕獲できる確率が高くなる。あまり近くにいるウサギを「銃」で撃つ場合は、逆に追い出す。10～15mくらい離れて撃った方が、血が出なくてきれいな状態で捕る事ができるからである。時幸さんは12番口径の散弾銃を使ったが、時幸さんの先輩達は単弾（19番20番22番が最適）で撃った。32番で撃っている先輩を見た事もあるが、小さい単弾で撃つと命中率が高く血が流れにくい。マタギは雪の中でも白いウサギをすぐに見分けることができる。それはウサギの目と耳の先が黒いので、それが目印になるからである。

父の時代に山子（木を伐る専門の人）さんに誘われて白神山地で猟をした事があり、その折ウサギの皮を剥いた肉を炭俵に10羽20羽と詰めて鉄道のチッキで送ってよこした。皮はその場で干すと2～3日で乾くので現場で処理した。その頃の事情を推測してみると、山仕事の人達に誘われたのは、マタギに猟をしてもらうことで、山子さん達にとっては肉の食糧調達に都合がよく、相互に助け合いができたためではないかと思われる。ちなみに昔はサルのことをシシとも言ったそうだ。

罾による猟

「ひら落とし」は大型でクマやカモシカなどを圧死させて捕る罾である。「けんなわ」は動物が通るとすとんと落ちる仕掛けだが、雨が降ったり凍ったりすると機能が半減するので、仕掛けるのは9月の中旬から11月の初旬まで。雪の少ない時は「うっちょ」という小型の「ひら落とし」でウサギ、タヌキ、テン、キジ、ヤマドリなども圧死させて捕る。「はこ落とし」はイタチを捕る罾。イタチは「竹筒」でも捕る。「竹筒」はネズミ・イタチ・テンなどの小動物を捕る罾で、根元に空洞があるような大木の根元や獣道（獣が必ず通る道）に設置する。雪の日は小動物の足跡がついており、通り道がよく分かる。雪の降った時のウサギの罾は「ひくぐし」と言い針金製の「くくり罾」である。罾を仕掛ける場合は、直ぐに罾を置くのではなく2、3回餌を置いておき、安心させてから仕掛ける。

9月前の猟は「ひら」のような罾を仕掛けて捕るが、暖かくて腐りやすいため、毛皮の質が悪く、手間が掛かる割りに良い結果が得られない。またその時期は農作業が忙しいので主な猟期は秋から冬に掛けて行われる。罾は秋口の9月下旬から10月に仕掛けておく。11月になると凍ってしまうため、罾を仕掛けても逃げられる確率が高くなる。ヤマドリは雪が降ると水辺に落ちている木の実などを食べに来るので、そこを狙って罾を仕掛ける。落とし穴の猟はなかった。

3 またぎ（狩猟）用具

衣類

写真番号 66
分類名 上衣
資料名（地方） かつぼう
よみ Kappo
重量 490g
材料 麻布
用途 「またぎ（狩猟）」に行く時に着用する
使用方法 素肌の上に[肌着（麻布の1枚もの）]を着てから[かつぼう]を着て、[はらかけ]を着ける。
備考 [かつぼう]の他に袖の形から[てっぽう]という言い方もした。[ちゃんちゃんこ]は今でいう[はっぴ]みたいなもので、子供に着せるが、大人も寒い時には着ることがある。祖母松橋スミ（根子出身）はホオ材で作った[機]で織っていた。[木綿機]と[麻機]の両方あった。二階に[はたし]がおいてあった。暖かくて明るい場所であった。時幸が小学校2、3年生までは孫ばあさんのスミが機織りをしていた。11月下旬頃に機織りをやっていた。

収蔵施設 松橋時幸家



写真番号 66

写真番号 67
分類名 衣
資料名（地方） 帯
よみ Obi
重量 95g
収蔵施設 松橋時幸家



写真番号 67

写真番号 後出写真 167 参照
分類名 上衣
資料名（地方） はらかけ（まえかけ）
よみ Hara-kake(Mae-kake)
材料 船の帆を作る時に使用されているのと同様の生地
材料入手方法 父が北海道（札幌周辺）で生地をみつけた。
用途 [銃弾]や[小刀]などの道具を保管する
使用者 時幸
使用年代 昭和35～40年頃
使用方法 [空砲]や[実砲]を仕分けして入れる。[まきり]も内側の真ん中のポケットに横にして入れた。普通は[リュック]に入れる。猟の時に使用しやすいように、ポケットのどの位置にもものを入れるか工夫した。

製作（入手）者 鷹巣の仕立屋

製作入手方法 他のもは奥さんたちが作るが、[はらかけ]は破れにくいように厚い生地を選んだので針が通らず、仕立屋に頼んで[ミシン]で作ってもらった。家には[ミシン]がなかった。

備考 時幸が使用していた[はらかけ]は星形の刺繍が入っているもので、県外での展示に貸し出したが、そのまま戻ってきていない。星形の刺繍はちょっとやそつとで破れないように、[はらかけ]を丈夫にするためのものである。[はらかけ]を使用するようになったのは、[火縄銃]を使っている頃からと思われるが、時幸が覚えている範囲では[村田銃]の時代にも使っていた。

収蔵施設 松橋時幸家



後出写真番号 167

写真番号 68
分類名 下衣
資料名(地方) はかま
よみ Hakama
重量 340g
用途 「またぎ(狩猟)」の時に[もんべ]の上に重ねて穿いた。
使用方法 [[はかま]の中には[もっこふんどし]を着ける。
備考 かつては尻の割れた形態の[もんべ]も穿いたようだ。マタギは薄着だが、広範囲にわたって動き回るので、厚着をしない方がよいとされる。どうしても寒い時には着皮を着る。
収蔵施設 松橋時幸家



写真番号 68

写真番号 69
分類名 手に着けるもの
資料名(地方) てうえ
よみ Te-ue
重量 両方で 50g
材料 麻布
用途 手首が冷たくならないように使用する。マタギが使うものは中指に1本引っ掛ける形のもの。
製作(入手)者 奥さんが作る
備考 [てうえ]の上には[てっきゃあす]を着ける。2、3本の指にひっかけて、手首に巻く。「またぎ(狩猟)」用のものは中指1本に掛ける形態のものである。
収蔵施設 松橋時幸家

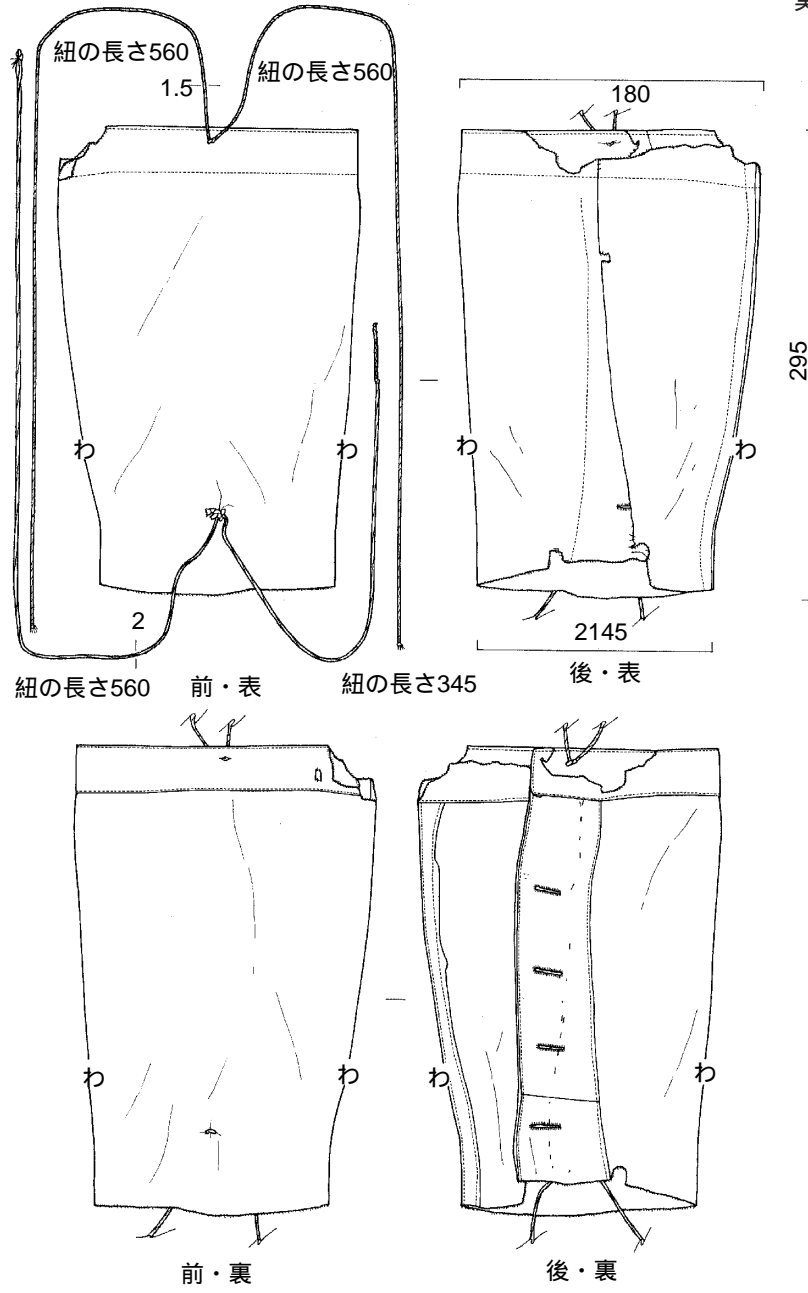


写真番号 69

写真番号 70
分類名 手に着けるもの
資料名(地方) てっきゃあす
よみ Tekkyasu
重量 両方で 150g
材料 藁材
用途 防寒用。[てうえ]を着けた上にはめる。藁材で作った[手っきゃあす]は「またぎ(狩猟)」では使用せず、畑仕事の時に使用する。藁製のものは濡れると凍る。カモシカの毛皮で作ったものは濡れると暖かくなる。
備考 かつてはアオシシ(カモシカ)の脛と頬の毛皮で作った。1頭のアオシシ(カモシカ)の4本の脚と顔から[毛たび]1足と[手っきゃあす]1対を作ること「二足裁ち」と言う。[毛たび]は脛の先のひずめのある甲の部分を利用する。[手っきゃあす]は頬の部分と脛の毛皮を利用して接ぎ合わせる。
収蔵施設 松橋時幸家



写真番号 70



写真番号 71 - 1

写真番号 71 - 1・71 - 2
実測図番号 38 (写真番号71 - 1)

分類名 足に着けるもの
資料名(地方) はばき(布はばき)

よみ Habaki(Nuno-habaki)

重量 71 - 1...両方で100g 71 - 2...両方で100g

材料 71 - 1 表地...麻布・平織り・糸の密度(5mm四方経糸11本×緯糸6本)・無地生成。縫い糸...黒色の綿糸。上紐...白色のたこ糸。下紐...麻糸10本を撚り合わせたもの。

用途 冬「またぎ」に出掛ける時は布製の[はばき]を使用し、脛を保護した。

使用方法 [はばき]を脛に穿いて、くるぶしの部分をめくり上げておき、[こはばき]を踵から足首に巻きつけて[毛たび]を履く。めくっていた[はばき]を下ろして紐を結ぶが、その際凍ると紐がほどけなくなるので、結び方を工夫した。

製作(入手)方法 71 - 1 手縫い。ミシン仕立ての洋服を再利用したもの。

備考 時幸が高校生になった頃は、昔の装束は使われなくなっていたが、先輩達がまだ使っていたため、その仕草を見て覚える事ができた。

旧所有者 松橋茂治(寄託)

収蔵施設 71 - 1...マタギ資料館(収蔵庫) 71 - 2...松橋時幸家

作図者名 角館さえ



写真番号71 - 2

写真番号 72
分類名 足に着けるもの
資料名(地方) ガマはばき

よみ Gama-habaki

重量 両方で200g

材料 ガマ材

材料入手方法 7月頃青いガマの葉を刈り取って軒下にかけて乾燥させる。

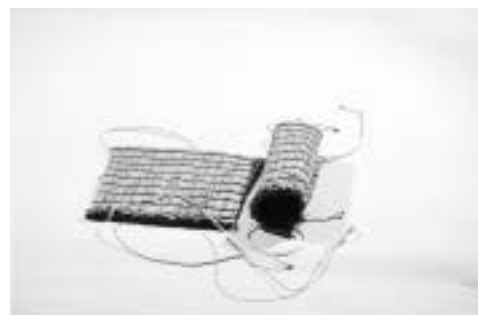
用途 夏用。脛の保護。

使用者 松橋時幸(「またぎ」が自分で作る)

製作(入手)方法 脛に合わせて寸法を見ながら、芯となる縄を適当な所に結びつけてぴんと張り渡す。ガマ材を半分に折り曲げて芯材となる縄に掛けて経芯とし、緯の芯材で編み込む。

備考 マタギが自分の脛の太さに合わせて作った。

収蔵施設 松橋時幸家



写真番号72

写真番号 73
分類名 足に着けるもの
資料名(地方) こはばき

よみ Ko-habaki

重量 両方で50g

材料 刺し子を施した綿布

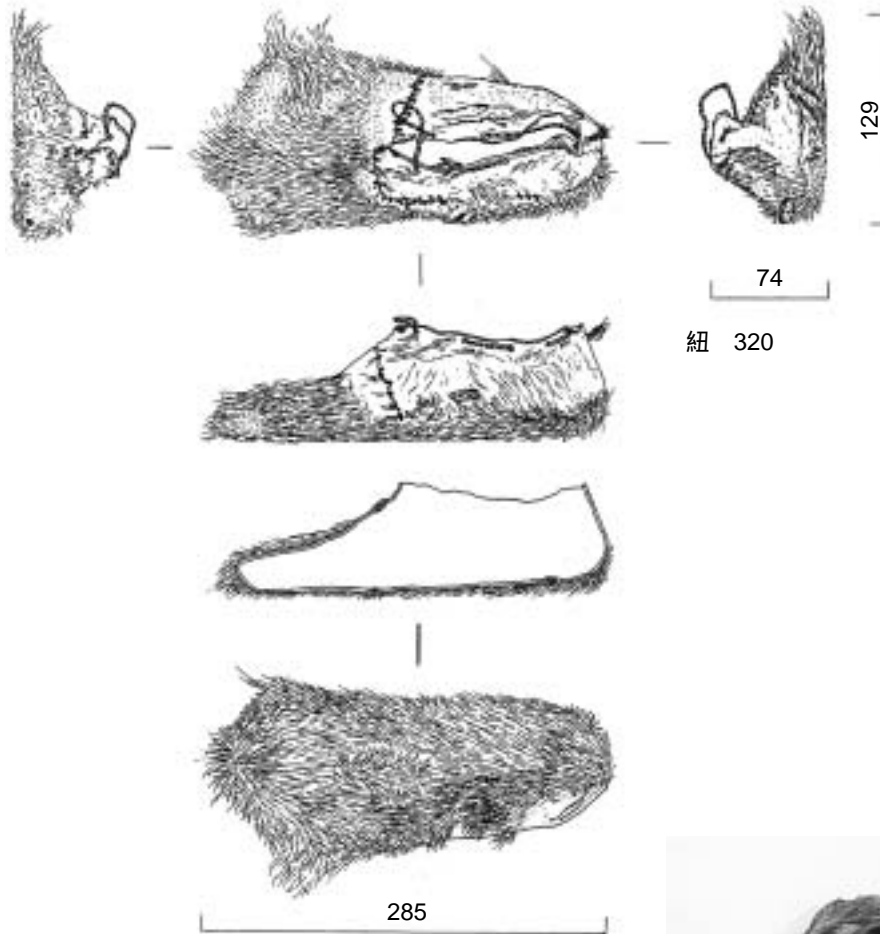
用途 [毛たび]を履く前に踵から足首にかけて巻く。

備考 無い時には[毛たび]のみ。

収蔵施設 松橋時幸家



写真番号73



紐 320



写真番号 74

写真番号 74
 実測図番号 39
 分類名 履き物
 資料名(地方) 毛たび

よみ Ke-tabi

重量 片方 100 g

材料 アオシシ(カモシカ)の毛皮

材料入手方法 1頭のアオシシ(カモシカ)の4本の脚と顔から[毛たび]1足と[手つきゃあす]1対を作ることを「二足裁ち」と言う。[毛たび]は脛の先のひずめのある甲の部分を利用する。[手つきゃあす]は頬の部分と脛の毛皮を利用して接ぎ合わせる。

用途 [毛たび]は雪の中で濡れると軟らかく、暖くなる。素足に[毛たび]を履いて[かんじき]を履く。

使用方法 履く時は水に浸けて軟らかくしてから履く。

備考 アオシシ(カモシカ)が捕れない時はイヌの皮で代用する人もいた。松治や時幸の時代にはゴムの[長靴]を履いた。[毛たび]は祖父の時代まで。父親が[毛たび]を履くのは見ていない。[毛たび]がない場合は殆どが藁製の[つまご]を履いていた。[毛たび]はとても履き心地の良いものだが、5、6年履き続けると底が切れて孔があき、いつも[毛たび]があるとは限らなかった。「しかり」の家では祖父の代までは「またぎ(狩猟)」の時は[毛たび]を履いたが、それ以外の仕事の時は、藁製の[つまご]を履いた。時幸が高校生になった頃は、家では昔の装束は殆ど使わなくなっていたが、先輩達の中にまだ使っている人がおり、その仕草を見て覚える事ができた。

旧所有者 松橋茂治(比立内地区、寄託)

収蔵施設 マタギ資料館(収蔵庫)

作図者名 田崎美紀子

写真番号 75 - 前右・後右・後左
分類名 履き物
資料名(地方) つまご
よみ Tsuma-go
重量 75 - 前右...両方で300g 後右...両方で450g 後左...
両方で450g
材料 藁材
用途 冬に履く。マタギも[毛たび]を持っていない人は新雪の時に履いた。夏も履く事があった。川など、ヘビがいるところで履いていた。
使用場所 屋外・山
使用方法 山仕事の時、足に履く。
製作(入手)者 マタギが自分で作った。時幸も作った。
備考 1箇月に5足履きつぶした。
収蔵施設 松橋時幸家



写真番号 75

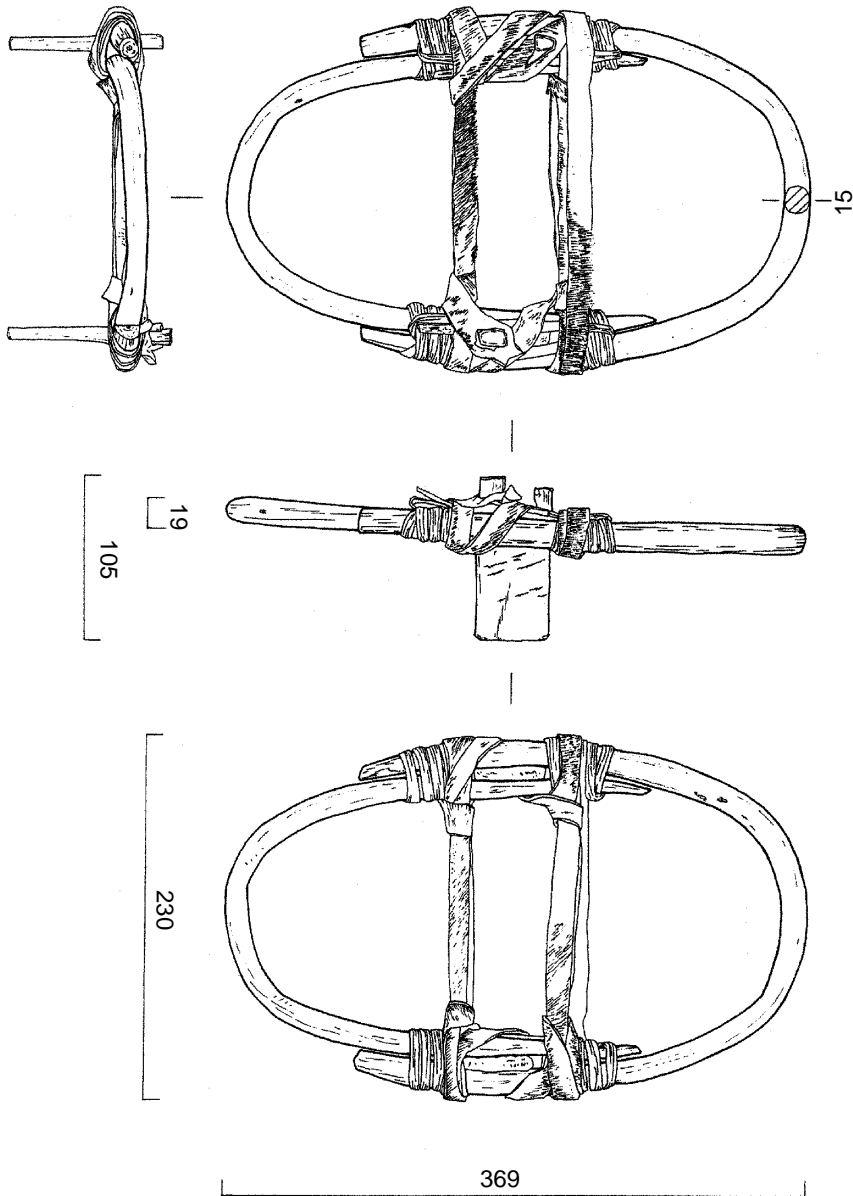
写真番号 75 - 前左
分類名 履き物
資料名(地方) わらじ
よみ Waraji
重量 両方で280g
材料 藁材
用途 山に行く時、川に行く時、全てこれを履いた。
使用場所 屋外
使用方法 外出時の履き物
備考 一年間に大人が一人で50足も使用した...駄目になったら作り替える。「あくと(踵)」の部分が一番壊れやすい。
収蔵施設 松橋時幸家

写真番号 76
分類名 履き物
資料名(地方) すべ(子供用)
よみ Sube
重量 両方180g
材料 藁材
用途 子供や女性が履く
使用場所 屋外
使用方法 子供や女性が近所に行く時に履いた。
備考 [あくどすべ]というものがあり、これは男性も履いた。[藁靴]や藁製品は、夜になると濡れた物が凍るので壊れやすくなる。管理が大変だった。そこで凍らないように[火棚]の上にかけて乾かした。[ごんべ]という履き物は藁材で編み上げの[くつ]の様なものを言う。
収蔵施設 松橋時幸家



写真番号 76

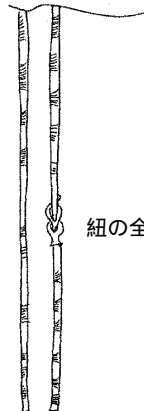
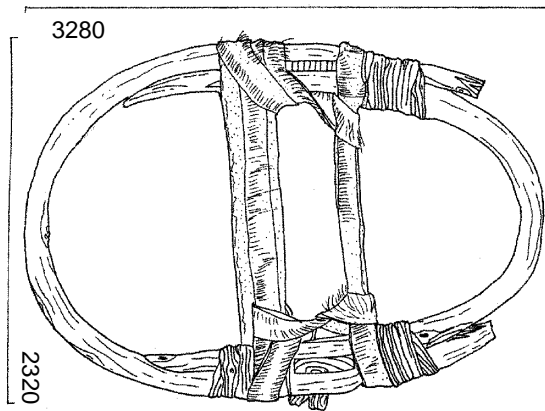
実測図 40



- 写真番号 77 - 1・77 - 2
実測図番号 40 (写真番号 77 - 1)・41 (写真番号 77 - 2)
分類名 履き物
資料名(地方) かんじき
よみ Kanjiki
重量 実測図番号 40...片方 298 g 実測図番号 41...両方で 510g
材料 前・後つば(本体)...イタヤ材 巻き締め材...サルナシ
つめ(歯)...イタヤ材 はね(足の甲を挟む場所)...牛皮
使用者 松橋茂治
用途 雪の深い時は、足がずぶりと雪の中に入り込んで歩けなくなるので、雪の中に足が沈み込まないように必ず履いた。
旧所有者 松橋茂治(比立内地区、寄託)
収蔵施設 マタギ資料館
作図者名 40...田崎美紀子 41...武田千鳥

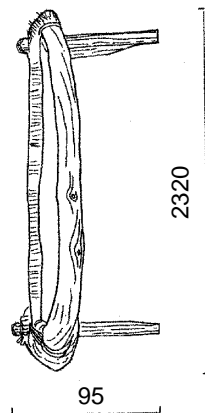
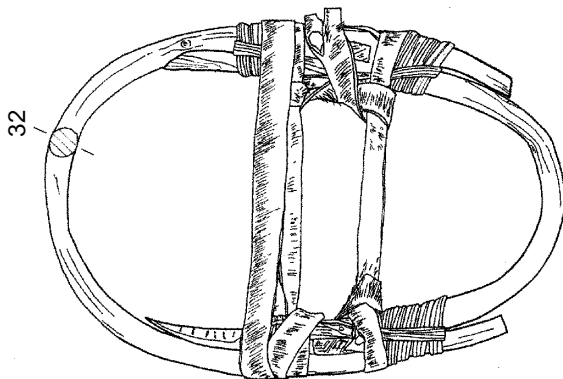
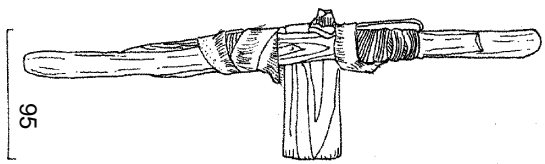


写真番号 77 - 1



実測図 41

紐の全長120~130 牛皮 片方1本づつ



写真番号 77 - 2

写真番号 なし(情報のみ)
 分類名 履き物
 資料名(地方) かなかんじき
 よみ Kana-kanjiki
 材料 鉄材

用途 「春またぎ(狩猟)」の時など、前日に雨が降ると雪が凍って滑るのでこれを履く。雪が解けると外した。また木に登って獲物を捕まえる時に履く。

備考 木に登る時にも[かなかんじき]を使用するが、[タカツメ]は木に登りやすいように歯が反っている。木に登ってムササビやモモンガを捕った。この地域ではモモンガをハクチョネズミという。(松橋時幸談)

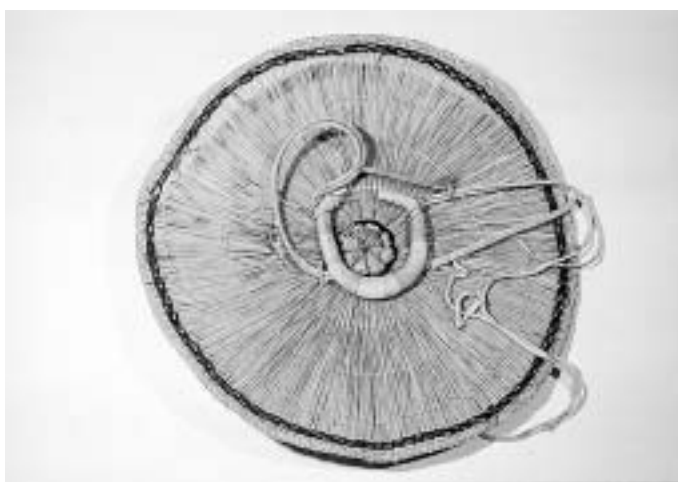
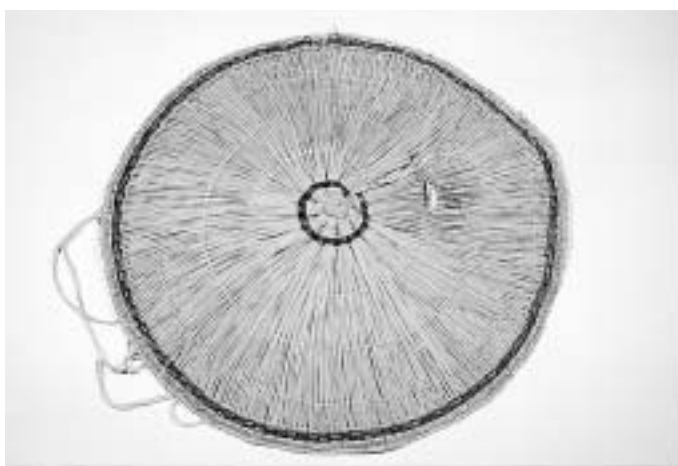
被り物

写真番号 78
分類名 被り物
資料名(地方) 頭巾(被り物)
よみ Zu-kin
重量 90g
材料 綿布
用途 防寒。
使用方法 四角い布を三角にして頭から耳を覆い、顎の下で結ぶ。その上に[あまぶた]を被る。
収蔵施設 松橋時幸家

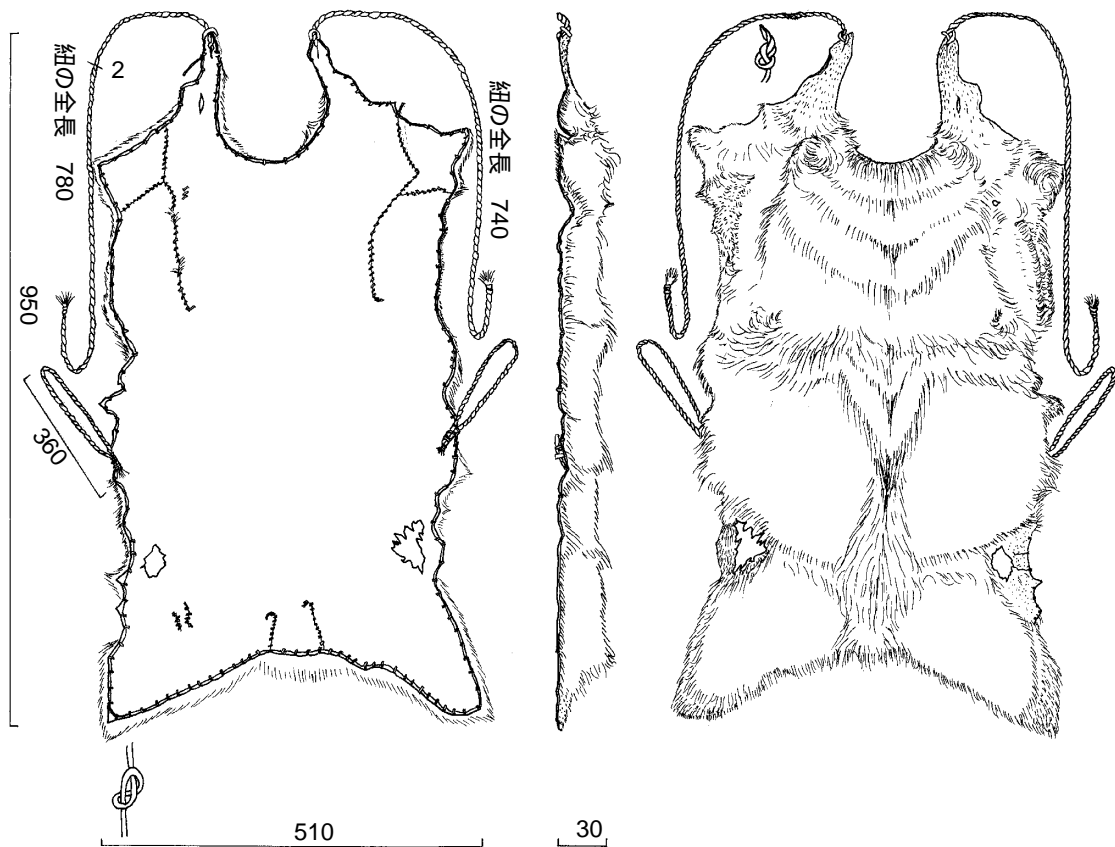
写真番号 79
分類名 被り物
資料名(地方) あまぶた(山笠型)
よみ Ama-butata
重量 130g
用途 日除け、雨よけ。防寒。
使用方法 四角い布を三角にして頭から耳を覆い、顎の下で結ぶ。その上に[あまぶた]を被る。
製作(入手方法) [あまぶた]はよそから買ってきた[山笠]をマタギ自身が見よう見まねで作った。時幸の自宅にある[あまぶた]は、叔父の金蔵が山形辺りから買ってきたもの。[あまぶた]はスゲや[みご縄]などで作った。
収蔵施設 松橋時幸家



写真番号 78



写真番号 79



写真番号 80
 実測図番号 42
 分類名 防寒具
 資料名(地方) 着皮
 よみ Ki-gawa
 重量 405g
 材料 イヌの毛皮
 用途 防寒用。
 備考 [ひだのそっか]という名前がつけ札についてるが、今回の3地区の聞き取り調査では、その名称の存在を確認できず、詳細は分からなかった。
 旧所有者 松橋卓治、松橋金蔵(比立内地区)
 収蔵施設 マタギ資料館(展示室)
 作図者名 武田千鳥

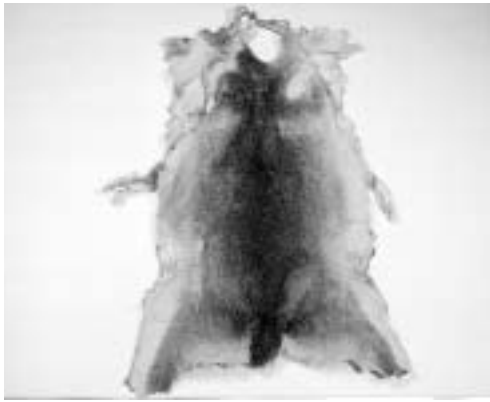


写真番号 80

写真番号 81(ひだのそっか) 82(イヌ皮) 83(イヌ皮はっぴ型)
 分類名 防寒具
 資料名(地方) 着皮(ひだのそっか・イヌ皮・イヌ皮はっぴ型)
 よみ Ki-gawa
 重量 81(ひだのそっか)...600g 82(イヌ皮)...500g 83(イヌ皮はっぴ型)...550g
 用途 イヌの[着皮]は毛が外側になるように着ける。風よけ、雨よけにもなる(松橋時幸談)
 製作(入手方法) [木枠]を使って生の皮を張り伸ばして乾燥する。[木枠]がなくても板戸に釘を打ち込み、そこに張りつけることが多いが、毎日使うとなれば[木枠]を作っておいた方がよい。[木枠]に張りつける場合は麻糸で縛り付けて張った。そうすると釘に張りつけるよりも傷まない。
 収蔵施設 松橋時幸家



写真番号 81 (ひだのそっか)



写真番号 82 (イヌ皮)



写真番号 83 (イヌ皮はっぴ型)

袋物

- 写真番号 84
 分類名 袋物
 資料名(地方) くらげ(獲物入れ)
 よみ Kurage(Emono-ire)
 重量 95g
 用途 獺に行く時に、おにぎりや弁当を入れて行き、帰りには捕った獲物を入れて来る。
 使用方法 野ウサギ、ムササビ、テンなど捕った獲物を入れる。
 備考 ヤマドリは剥製にするため[くらげ]には入れず、傷まないように別の狩猟用リュックに入れる。[まきり]を入れる人もいる。
 収蔵施設 松橋時幸家



写真番号 84

- 写真番号 85
 分類名 袋物
 資料名(地方) リュック(狩猟用)
 よみ Ryukku
 重量 650g
 用途 捕った獲物や弁当を入れる。
 使用方法 リュックは外側に網の部分が付いている。獲物によって入れる所を区分する。
 備考 捕ったキジ、ヤマドリは剥製にするため、毛が駄目にならないように、リュックの網の部分に入れる。風通しを良くして「かぶれ(濡れてどこまでも汚れること)」を防ぐためである。ヤマドリ1羽は5000円程度で売れたものだったが、15年位前から乱獲禁止のため、キジ、ヤマドリを剥製にして売ることが禁止された。
 収蔵施設 松橋時幸家



写真番号 85

狩猟用具

写真番号 86 - 中・右
分類名 狩猟用具
資料名(地方) しなり(縄) = ザイル
よみ Sinari(Nawa)
重量 中...210g 右...150g 長さは3丈7尺(3尋半)と言われている。
材料 マニラアサ 昔はマダ(シナの木)の皮
用途 クマを引っ張ったり、担いだりするのに使用。
使用者 時幸
製作(入手)方法 マニラアサを使用する以前は、マダ(シナ)の木の皮を使用していた。マダの皮で作っていた頃は、最初2本撚りにしてからもう1本を絡げて3本撚りにしていく。縄を作る時に特別な道具は使用せず、手で編んでいた。
備考 [背負い縄(写真番号86-左)]はマダ皮製。時幸が平成7年頃作った。縄の場合は直径4センチ程度のマダの木を使用。[けら(蓑)]を作る時には太い木を使用する。[けら]は普通の農作業や山仕事の時に着るが、猟の時には着ない。
収蔵施設 松橋時幸家

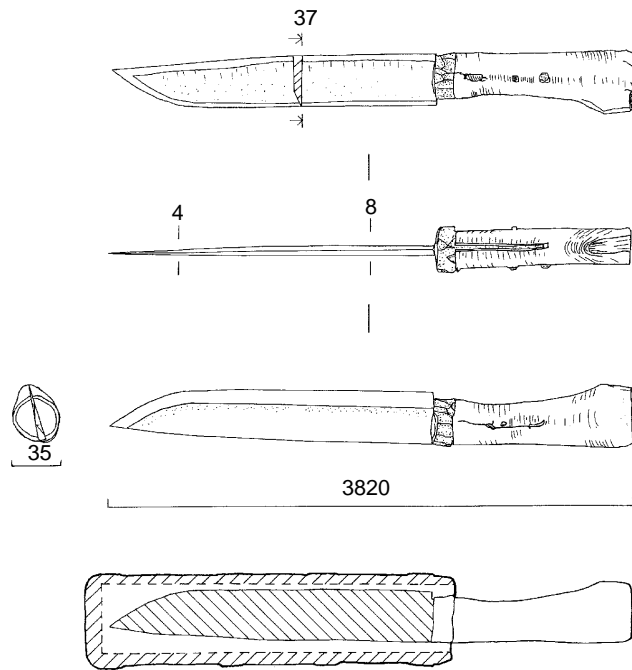


写真番号 86

写真番号 87
分類名 狩猟用具
資料名(地方) 火薬入れ
よみ Kayaku-ire
重量 50g
用途 火薬を入れて常に山に持ち歩く。[弾]は[弾]で持って歩いているが、例えばウサギを追い掛けている時にクマの足跡に出合ったりする場合があります。猟の対象がクマに切り替わる場合がある。そういう時用意した[実弾]が足りなくなったりするので、空になった[薬莢]に経験を生かして目分量で火薬を詰め、[厚紙]を入れて押し、次に必要な[弾]をこめて押し、更に[厚紙]を入れて押しして[実弾]を作る。そういう時に使用する火薬を入れたものがこのような[火薬入れ]である。
備考 [火薬入れ]は湿気を嫌うため、精巧な作りであった。マタギの人たち自身が自分で製作した。サクラ皮のものもある。[火縄銃]の火薬入れの事を[どくすりっぽ]という(松橋時幸談)。
旧所有者 松橋茂治(比立内地区、寄託)
収蔵施設 マタギ資料館(展示室)



写真番号 87



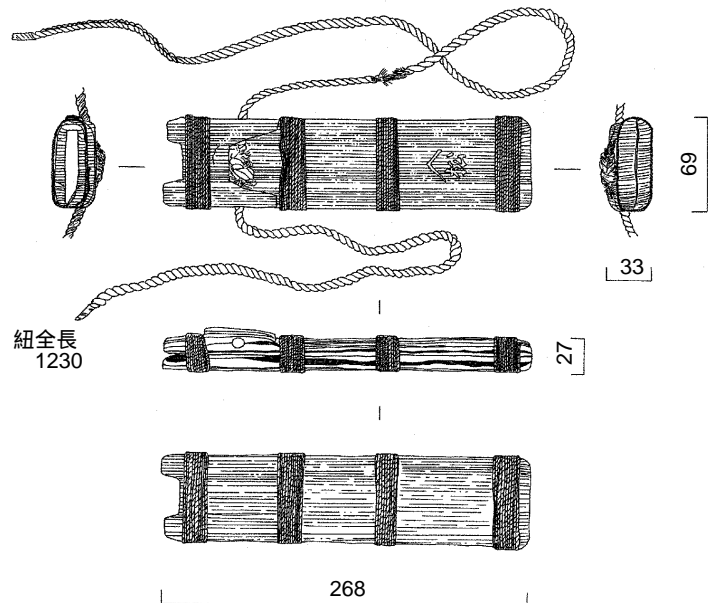
写真番号 88

実測図 43

写真番号 88
 実測図番号 43
 分類名 狩猟用具
 資料名(地方) ながさ・さや
 よみ Nagasa・Saya
 重量 540 g
 材料 身...鉄材 さや...スギ材・綿糸
 用途 クマを銃で撃つ事が間に合わず、
 とっさにこれで闘うこともある。
 木を伐る事も、動物を解体する事
 も出来る。

製作入手方法 [さや]は1木のスギ材を割って、
 それぞれの内部を身が収まるよう
 に彫る。2枚のスギ材を重ね合
 わせて、4箇所綿糸を巻いて固定
 する。

旧所有者 松橋茂治(比立内地区、寄託)
 収蔵施設 マタギ資料館(展示室)
 作図者名 武田千鳥



写真番号 89
 分類名 狩猟用具
 資料名(地方) ふくろながさ([たて]としても使用)
 よみ Hukuro-nagasa
 重量 420 g
 材料 身...鉄材
 用途 腰に差している[ふくろながさ]は、クマを銃で撃つ
 事が間に合わない場合、とっさにこれで闘うこともあ
 る。また身が長くて重いものは川岸の立ち木を伐って
 橋を架けたりすることもできる。必要に応じて、柄を
 現地調達することで[たて]としても使用する。

使用年代 昭和50年代の後半(25年位前)から使用。
 使用方法 [ふくろながさ]を[ながさ]として使用する場合は「ふくろ」の部分
 が柄になる。クマが出そうな気配を感じ
 た時は、腰に差している[ふくろながさ]に合う木を現地調達して削り、柄
 を用意して歩いた。[ふくろながさ]
 に柄を差し込んで[たて]として使用する。

製作(入手)者 時幸の発案で西根鍛冶屋が作った。[ながさ]を持ち、更に長い[たて]を持って歩くのは邪魔になるという考



写真番号 89

えから、この形を発案して使用した。
 製作(入手)年代 昭和50年代の後半(25年前)
 製作(入手)場所 荒瀬
 備考 [ながさ型のたて]はクマを突く事も木を伐る事もでき万能であった。時幸の子供の頃は、傍に分家からいった松橋鍛冶屋さんがあり、時幸の遊び場ようになっていた。夏冬鍛冶屋さんに行っていたが、夏は[カジカやす][マスやす][じゃっこやす]などを作ってもらった。冬は[ながさ]を作ってもらったりしている環境があったので、[ふくろながさ型のたて]という発想に結びついた。この辺は皆農家で、そのような鍛冶屋では農具も作っていた。
 収蔵施設 松橋時幸家

写真番号 90
 分類名 狩猟用具
 資料名(地方) たて(ふくろながさ型)
 よみ Tate
 重量 1.2kg
 材料 身...鉄材 柄...イタヤ材(ナラ材でもいいが重い)
 用途 クマを突く



写真番号 90

使用方法 [たて]はクマとの接近戦になった場合、立ち上がって腹を見せる状態になるのでそこを突く。また穴の中で子育てしているクマの傍をマタギが通ったような場合、クマがマタギの存在に気づくとうなり声を出すことがある。マタギの側はそれでクマがいることが分かる。そのような時、クマの穴をのぞき込む事になるが、その際必ず[たて]の穂先を目の高さに構える。穴からクマが出て来た時は、[たて]を突きだしたままマタギの方は反射的に顔をぐっと後ろに退く。クマの方は[たて]に突き刺さる。その時クマは目の前にあるものをクマ自身が持って引き込む習性があるため、[たて]の柄も自分で持って引き込んでしまう。それゆえより深く[たて]が突き刺さる事になる。
 製作(入手)方法 柄はマタギが自分で作る。1.5m位の長さ。材料は現地調達で、歩きながら発見する。1.2m~1.3mあれば活用できる。
 収蔵施設 松橋時幸家

写真番号 なし(情報のみ)
 分類名 狩猟用具
 資料名(地方) まきり
 よみ Makiri
 材料 身...鉄材
 用途 クマを解体するための道具。
 使用方法 クマの口を解体する。クマの手足の指の関節を仕分けする時にも使用する。
 備考 [まきり]がない時は[ながさ]を使用するが、[まきり]の方がきれいに切ることができる。[はらかけ]のポケットの真ん中に横にして持ち歩く人もいるが、ふつうは狩猟用リュックに入れて持ち歩く。刃を研ぐのは自宅で行うが、山小屋に小さい砥石を持って行って備え付けておくこともある。

写真番号 なし(情報のみ)
 分類名 狩猟用具
 資料名(地方) おおながえ(またぎべら)
 よみ O-nagae(Matagi-bera)
 本来長さは4尺2寸と言われている。
 材料 イタヤ材 [おおながえ]はナラ材を使用することもある。
 材料入手方法 現場調達する事もある。
 用途 山の斜面を歩く時、山側に杖のように突いて歩いたり、傾斜地を登る時に胸まである雪を漕ぐようによけたり、雪洞を掘ったり、ウサギが逃げ込んだ穴を掘ったり、銃座にもした。アオシシ(カモシカ)などを捕まえた時、獲物の急所を叩いて殺したりするが、これは鉄砲で撃っても急所をはずれた場合に獲物が歩きまわり、人間の方が危なくなる場合もあるので、叩いて殺す事もある。また「春またぎ(狩猟)」の時には、急な斜面を下りる時に、[またぎべら]を股に挟んで柄の部分を両手で持って[長靴]で滑り下りる。そうして使っていると[またぎべら]は反ってくる。

使用年代 父松治の頃には[ながえ]も[さって]もあった。
 製作(入手)方法 現場で材を調達して[ながさ]で削った。
 備考 「またぎ(狩猟)」の時の7つ道具のひとつ。この比立内辺りで持つのは[こながえ]が多かった。ナラ材で作ると、重いが壊れにくくて、獲物を叩き殺すのには良い。イタヤ材の場合は手前に何も無い場合はいいが、雪の下に横たわっている木に気が付かず強くひっぱたく(だいごし)と、柄が折れてしまうことがある。ありとあら

ゆる事を想定しながら「もの」を使っていかないとえらい目に遭う。[またぎべら]は使っているうちに反ってくる。[おおながえ][こながえ]などをまとめて[またぎべら]と呼ぶ。

写真番号 91 - 後
分類名 狩猟用具
資料名(地方) こながえ
よみ Ko-nagae
重量 280g (この資料は模型) 本来は長さが3尺8寸と
とわれている。
材料 イタヤ材
材料入手方法 現場調達する事もある。
用途 [おおながえ]と同じ用途
使用年代 父茂治の頃には[ながえ]も[さって]もあった。
製作(入手)方法 現場で材を調達して[ながさ]で削った。
備考 小屋掛け(常時3名くらいが泊まれる場所)してある場所はあるが、急に吹雪きになったり、雪が沢山降って疲れて歩けなくなったような時に雪洞を掘って休息する。[またぎべら]で雪を掘ったりブロックを作ったりする。山で[またぎべら]が折れたりすることがあるが、その場合は代用品を作った。例えばホオの木の子の枝の部分を[ながさ]で削って切り取り、それを削って成形すると[鎌の台]に似た形になる。その形は[さって]にも似ていて、雪を掻き分けるには[またぎべら]よりも使い良かった。



写真番号 91

写真番号 91 - 前
分類名 狩猟用具
資料名(地方) さって
よみ Satte
重量 200g (この資料は模型)
用途 雪をかき分ける。雪洞を掘る。銃の台座。
使用方法 カヤぶき屋根の雪下ろしにも使用。
備考 [またぎべら]よりも新しく改良したものが[さって]。時幸が子供の頃には[さって]も[ながえ]も両方あった。雪洞作りは[またぎべら]の半分の時間で掘る事ができ、使い勝手の良いものだった。「わば(新雪の表層雪崩)」が起きた時に、[またぎべら]や[さって]をざっくり差して、それに掴まって助かった先輩達がいる。[またぎべら]や[さって]に覆い被さるように体重を掛けると、その重みで転げ落ちるので、本当に掴まる程度が良いと言うことである。ちなみに「なで」とは前走雪崩のことである。

写真番号 92 - 左・中・右
分類名 狩猟用具
資料名(地方) わらだ
よみ Warada
重量 左...270g 中...290g 右...260g
材料 藁材
用途 ウサギを捕まえる時の道具。
使用者 時幸は実際に使ったことがない。
使用方法



写真番号 92

ウサギは天敵のタカやテンに襲われる事があるので、逃げる場所を確保するため穴を掘っておく習性がある。主に上から襲う猛禽類のタカのような羽音がした場合は、掘った穴に隠れる。そうしたウサギの習性が分かっているので、タカの羽音に似た音を出す[わらだ]を投げて、ウサギを穴に追い込む。2回くらい[わらだ]を投げると、後ろ足で雪を蹴るようにして巣穴に入り込む。それを見定めてから、マタギが走って行って、ウサギが出られないようにその穴を雪で閉じてしまう。それからその穴の辺りを[かんじき]でびっしり踏み固める。脇の方から[さって]や[こながえ]でウサギを掘り出す。脚を捕まえて引っ張り出したら、耳をもってぶら下げて、頭の付け根に手で一撃を加えて捕る。

製作(入手)者 使いやすく良い羽音ができるように、マタギが自分で作る。
製作(入手)場所 藁製品を作る時には「ゆるぎ」の脇で作った。
収蔵施設 松橋時幸家

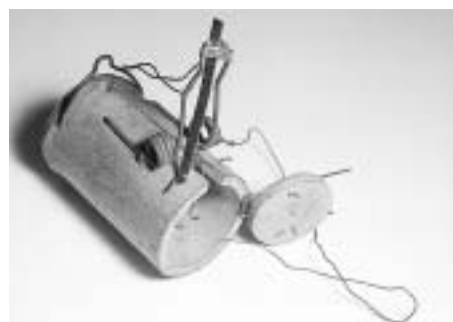
写真番号 なし（情報のみ）
 分類名 狩猟用具
 資料名（地方） とらばさみ
 よみ Tora-basami
 材料 鉄材
 用途 小さいクマも捕れる。大きいクマでは壊される。
 製作（入手）方法 市日の時などに購入
 備考 挟む所にぎざぎざがあり抜けないようにしている。大型の罠

写真番号 93
 分類名 狩猟用具
 資料名（地方） がばさみ
 よみ Ga-basami
 重量 260g
 材料 鉄材
 用途 イタチ・テン・ヤマドリなどを捕る。
 製作（入手）方法 市日の時などに購入
 収蔵施設 松橋時幸家



写真番号 93

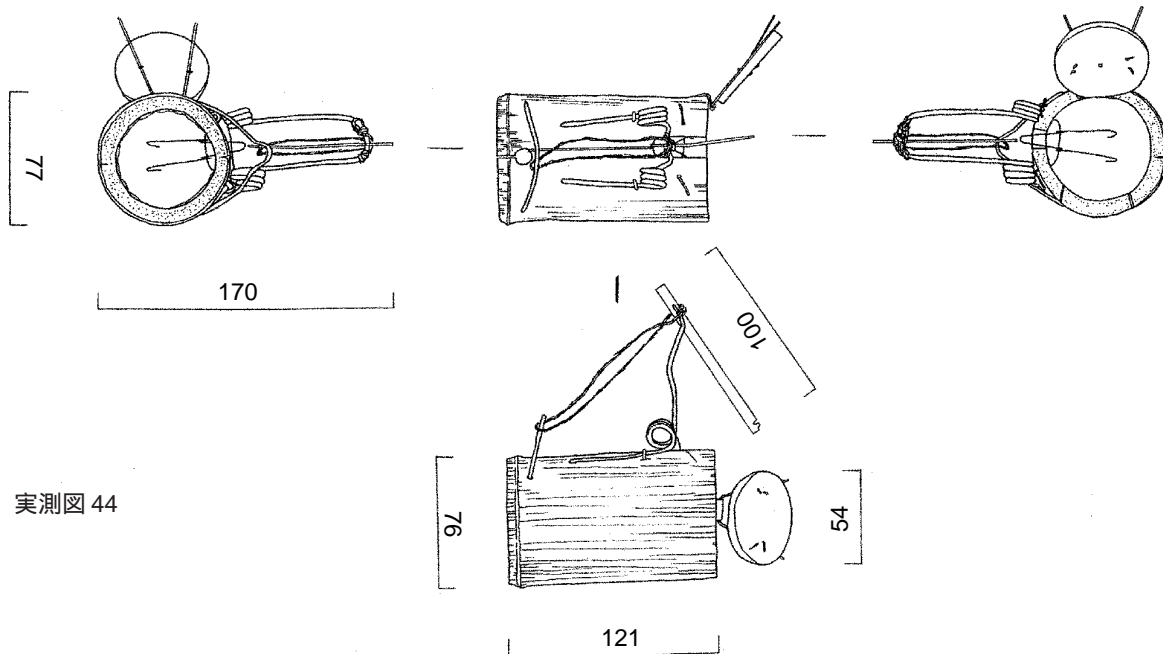
写真番号 94・95 - 左・右
 実測図番号 44（写真番号 94）
 分類名 狩猟用具
 資料名（地方） 竹筒
 よみ Take-dutsu
 重量 実測図番号 44...231 g 写真番号 95 - 左...260g 95 - 右...200g
 材料 タケ材
 用途 ネズミ・イタチ・テンなどの小動物を捕る罠
 使用年代 昭和初期から昭和 40 年代まで使用か？
 現在では使用していない。
 使用場所 冬期間に獣道に設置する。雪の日は小動物の足跡が付いており、通り道が分かる。
 使用方法 筒の中に餌（煮干しやニワトリの骨など）を付けておく。パネ仕掛けになっていて獲物が餌を引っ張ると、胴体が仕掛けの紐に引っ掛かるようになっている。
 製作（入手）方法 市日の時などに購入
 収蔵施設 マタギ資料館（展示室）
 作図者名 田崎美紀子



写真番号 94



写真番号 95



実測図 44

製薬用具

写真番号 96
 分類名 製薬用具
 資料名(地方) 薬研
 よみ Yagen
 重量 2.9 kg
 用途 薬を作る時の粉碎器。

使用方法 クマの頭骨や脛の骨などを黒焼きにしたもの、あるいは「ふえたり(クマの血を乾燥させたもの)」、また「さんこ(産子)」と言って、生まれて間もないサルの子やクマの子を乾かした物等を、薬研で磨り潰して薬にしていた。マムシも干して磨り潰し薬にした。これは家畜にも飲ませた。

備考 産後の女性は貧血気味になるので「ふえたり」を飲ませ、増血剤にしていた。行商の人が来た時に薬の作り方を教えてもらった。行商をする人は薬にしない前のものを買ってきた。「配置売薬」とは置き薬の事で、富山の薬売りは有名である。今の人は「ふえたり」などは作れないし、効力も分からない。しかし、クマの胆は今でも薬屋が買いに来る。クマの胆を挟んで乾かす板があり、マタギは以前からそれを使用していたが、20年位前に他県の人が特許をとってしまった。クマの胆は丸いと量りにくいので、平にする必要がある。クマの胆は乾いてしぼんできたものを手揉みして平たくする。乾かして、3、4日以降からは1日に2、3回手揉みをし仕上がるのに10日間位かかる。マタギは配置売薬の行商もしたが、その折猟の知識や獲物を捕るための罟類を広める役目を結果的に担った。

収蔵施設 松橋時幸家



写真番号 96

写真番号 112
分類名 狩猟用具
資料名(地方) おくり棒
よみ Okuri-bo
重量 160g
用途 [筒]の中の掃除をする。
収蔵施設 春日克男家



写真番号 112

写真番号 113
分類名 狩猟用具
資料名(地方) あらい矢
よみ Arai-ya
重量 金属製のブラシ...15g
用途 [ケース]や[銃]を掃除する
使用方法 黒色火薬なので[筒]の中に煤が溜まるので掃除をする必要がある。[おくり棒]の先に[あらい矢]という掃除をする道具をつける。[あらい矢]には金属のもの、黒い[たわし]状のもの、綿製、毛製などがある。最初に鉛のかすがあるので金属のものを使用してこすり取る。次に黒い[たわし]状のもので煤をとる。そして、最後に綿製や毛製の矢に油をつけて[筒]の中を光るようになるまでこする。
収蔵施設 春日克男家



写真番号 113

写真番号 114
分類名 狩猟用具
資料名(地方) 獲物を下げる道具
よみ ?
重量 50g
用途 腰に付けて、捕った獲物をぶらさげる。
収蔵施設 春日克男家



写真番号 114

写真番号 115
分類名 狩猟用具
資料名(地方) クマの頭骨
よみ Kuma-no-tokotsu
重量 395g
備考 クマの頭は、猟でクマを仕留めた人がもらう。このクマの頭は、克男が50歳位の時に、白子森に10人位の団体に猟に行った時に撃った。
収蔵施設 春日克男家



写真番号 115

写真番号 116
分類名 信仰・慣習
資料名(地方) おこぜ
よみ Okoze
重量 4.5g
材料 オコゼ(魚)
用途 神様に供える。
収蔵施設 春日克男家

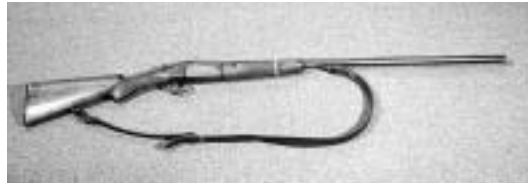


写真番号 116

春日克男家収蔵の〔元折れ銃〕関連用具

春日克男（昭和6年2月2日生）さんが「またぎ（狩猟）」を始めたのは昭和38年10月1日の事である。はっきり日にちを覚えているのは、「まきがり」の「勢子」に駆り出されたのがきっかけだったからだそうだ。その後、猟をするようになってからは〔元折れ銃〕を使用したという事で、関連用具一式が残っている。〔元折れ銃〕で捕っていたのは、ウサギ、カモ、ヤマドリ、キジなど、いたずらでスズメやハトを撃ったこともあるとの事で、獲物を撃つ時には〔散弾〕を使用していた。克男さんの場合は毛皮や薬を売っていた時代のマタギというイメージよりは、猟を始めた年が昭和38年という事で、どちらかといえば現代風のハンターに近いのではないかという印象を受けた。後で登場して頂く鈴木米孝さんが昭和26年生まれなので、その間をつなぐ世代と言える。

写真番号 97・98
 分類名 狩猟用具
 資料名（地方） 元折れ銃
 よみ Moto-ore-ju
 重量 97... 3 kg 98... 3 kg
 収蔵施設 マタギ資料館（展示室）



写真番号 97



写真番号 98

写真番号 99
 分類名 狩猟用具
 資料名（地方） 弾帯
 よみ Dan-tai
 重量 320g
 用途 [実弾]を入れて持ち歩く用具
 使用者 春日克男（昭和6年2月2日生）
 使用年代 昭和38年以降
 使用方法 体の両脇に弾がくるように腰に巻く。〔弾帯〕には色々な種類の〔弾〕を入れる（獲物によって使用する〔弾〕の大きさが異なる）。
 収蔵施設 春日克男家



写真番号 99

写真番号 100 - 1
 分類名 狩猟用具
 資料名（地方） ケース（薬莖）
 よみ Kesu(Yakkyo)
 重量 32g
 用途 火薬や〔弾〕を込める入れ物
 収蔵施設 春日克男家



写真番号 100 - 1

写真番号 100 - 2
 分類名 狩猟用具
 資料名（地方） 散弾
 よみ San-dan
 収蔵施設 春日克男家



写真番号 100 - 2

写真番号 101 - 左・右
 分類名 狩猟用具
 資料名(地方) ケース抜き
 よみ Kesu-nuki
 重量 101 - 左...355g 右...335g
 用途 [雷管]を詰めたり、抜いたりする。
 収蔵施設 春日克男家



写真番号 101

写真番号 102・103
 分類名 狩猟用具
 資料名(地方) たま詰めだい
 よみ Tama-tsume-dai
 重量 102...鉄の台 830g 木部 65g 103...木製 335g
 用途 [雷管]を抜く時に使う。[ケース抜き]と同じ役目。
 備考 箱に「12保ゴ器 180東京製」と記されている。春日家には[ケース抜き]と同じ役目をする[雷管抜き]が4種類ある。
 収蔵施設 春日克男家



写真番号 102



写真番号 103

写真番号 104
 分類名 狩猟用具
 資料名(地方) 火薬ばかり
 よみ Kayaku-bakari
 重量 20g
 用途 火薬の量を量る
 製作入手方法 内沢の銃砲店で購入。いろいろな場所の銃砲店で購入した。
 収蔵施設 春日克男家



写真番号 104

写真番号 105
 分類名 狩猟用具
 資料名(地方) 送り蓋
 よみ Okuri-buta
 重量 厚紙...0.1g
 用途 [ケース(薬莢)]に[雷管]を詰めてから、[火薬量り]で火薬の量を量って入れる。次に[厚紙]を詰め[送り蓋]を詰めて[散弾]を入れる。そして最後に再び[厚紙]を入れて[送り蓋]を入れ、更に[厚紙]を入れる。[厚紙]や[送り蓋]を入れるのは、[弾]の圧力を高くするためである。箱の中に入っている紙片に赤字で「真鍮薬莢 番用送蓋」と書かれている。
 収蔵施設 春日克男家



写真番号 105

写真番号 106
分類名 狩猟用具
資料名(地方) クマだま
よみ Kuma-dama
重量 30g
用途 [元折れ銃]に使用したクマを撃つ[弾]
備考 通称[ロケット(弾)]は真っ直ぐに飛んでいく。[アエデアール(弾)]は回転しながら飛んでいく。[ロケット]より新しい。
収蔵施設 春日克男家



写真番号 106

写真番号 107
分類名 狩猟用具
資料名(地方) 送り抜き
よみ Okuri-nuki
重量 12g
使用方法 [ケース]に詰める場合、その入れ方を失敗する事もあるので、[ケース]の中のものを取り出すために使用。
収蔵施設 春日克男家



写真番号 107

写真番号 108
分類名 狩猟用具
資料名(地方) ケースしばり
よみ Kesu-shibori
重量 185g
用途 使っている打ちに[ケース]が膨らんでくるため元の形に戻す。
使用方法 [ケースしばり]に絞るようにしながら[ケース]を差し込み、形を整える。
収蔵施設 春日克男家



写真番号 108

写真番号 109
分類名 狩猟用具
資料名(地方) 筒先に蓋をするもの
よみ ?
重量 16g
用途 銃の筒先に蓋をし、吹雪の時などに雪が入らないようにする。
収蔵施設 春日克男家



写真番号 109

写真番号 110
分類名 狩猟用具
資料名(地方) ケース抜き
よみ Kesu-nuki
重量 20g
用途 空のケースを抜く
使用方法 [元折れ銃]を開いて、[ケース抜き]を小指に嵌めて空になった[ケース]を抜く。
収蔵施設 春日克男家



写真番号 110

写真番号 111
分類名 狩猟用具
資料名(地方) 発条(ばね)
よみ Bane
重量 5g
備考 [元折れ銃]の元折を開いた場所、その見えない所に入っている。
収蔵施設 春日克男家



写真番号 111